

第七章 カルヴァンのレトリック

(担当 関口 康)

はじめに

ロラン・バルトによると、レトリック（修辞学）とは、紀元前五世紀から一九世紀まで西欧に君臨したメタ言語（その対象言語は「言述」である）を指す。このレトリックが1970年代に復活した。復活の理由は、真理の探求とその伝達というすべての学問、特に哲学において中心的な課題において方法論・戦術論としての言語、とりわけ「メタ言語」としてのレトリックの重要性が認められてきたことである。つまり、レトリックは、事柄を隠蔽したり誇大化する手練手管の術としてではなく、ある事柄を発見し、それを表現していくための有効な方法として現われてきたのである。

ユマニズムの教養の中に育った改革者カルヴァンの素養としてレトリックは抜きがたく植えつけられており、そのしるしは著作の至るところに見出すことができる。カルヴァンにとっての大問題は、明白・簡明なる真理を「いかに同志、同情者および敵対者に伝え、説得するか」であり、その事業を可能にしたのが「レトリックの武器」であった。

一 レトリックとは何か

一九世紀までレトリックは、ことばによって説明する技術および魅力的なことばを生み出す技法の体系であった。はじめはもっぱら「弁論」の術として話す行為が対象となっていたが、やがて書き言葉の「修辞」へと重点が移っていった。レトリックの発祥は紀元前五世紀のシチリア島における土地所有権をめぐる訴訟にあった。その後の発展において、散文の言述に《司法的》・《審議的》・《演示的》という三つのジャンルが見られた。紀元前二世紀のアリストテレスのレトリックは、紀元前一世紀のキケロの実践と、紀元後一世紀のクインティリアヌスの体系化とによって、ほぼ完成された。

クインティリアヌスは『弁論術教科』において、弁論術を次の五部門から構成した。

- (1) 発想または発見 (inventio)
- (2) 配置 (dispositio)
- (3) 表現 (elocutio)
- (4) 記憶 (memoria)
- (5) 発表または行為 (pronuntiatio, actio)

さらに、クインティリアヌスは、《司法的》ジャンルの言述の中身を、次の五つの部分に分けた。

- (1) 序言 (exordium)
- (2) 陳述 (narratio)
- (3) 立証 (probatio)
- (4) 反証 (refutatio)
- (5) 結語 (peroratio)

キリスト教とレトリックの結びつきは、聖書自体の中にあっただが、それを自覚的に取り出して聖書解釈や説教に生かそうという試みが教職者の中に生まれてきた。それは一方でレトリックが「産出装置のかたちをした説明理論」であるという認識、また他方で聖書が多義的な詩的言語によって成り立っているという認識とに基づいていた。このキリスト教レトリックの代表者は、アウグスティヌスである。アウグスティヌスはミラノの国立大学で弁論術を教え、キケロやセネカやヴェルギリウスなどの文学に慣れ親しんでいたため、聖書の文体を初めは粗野なものと感じた。ところが、彼は、聖書の飲み下し難い文字の中にこそ比類ない真理が隠されていることに気づくに至り、弁論術の延長としてではなく、聖書解釈の論理、真理伝達の論理としてのレトリックを確立したのである。

ルネサンス期に、レトリックは再び世俗化していったが、ルフェーブル・デターブルやエラスムスといったユマニストらの聖書研究もまたこの時期に登場した。彼らはプラトンやアリストテレスの教説と聖書の教えを結びつけようと努力し、聖書の源流を探し求め、聖書の中に字義の意味と霊的意味との二つを読み取ろうとした。エラスムスはこの作業を言語学の才能と博学によって冷静に進めた。宗教改革第二世代のカルヴァンは第一世代のエラスムスらが苦心して得た研究成果を十分吸収した上で、ユマニズムの方法を聖書解釈に悠々と導入することができた。すなわち、カルヴァンは、説得の術や魅力的なことばを生み出す《産出装置》であり、かつ《説明理論》であるところのレトリックを獲得した。この「二重の武器」によってカルヴァンは教理を教え、聖書を解釈することによって福音主義の何たるかを伝え、論敵と戦い、信徒を慰めたのである。

二 カルヴァンのレトリック

1 表現としてのレトリック

(1) Inventio

Inventio の訳としては「言うべきことの発見」ないし「発想」が分かりやすい。ただし「主題探し」にとどまるのではなく「問題を扱う切り口」を加えるべきだろうか。問題はどのような状況で、だれに対して、どういう立場で、何のために書く（語る）かである。

改革者カルヴァンにとって、書くことは常に必要に迫られたものであり、多くの場合、緊急の必要に迫られていた。改革は戦いであり、書くこと・語ることは、武器であった。古い権威としてのカトリック教会と従来の生活習慣を捨てて新しい歩みをしていく信徒と指導者の前に次々に現れる疑問や障害の問題を即決するために、カルヴァンは *traités* と呼ばれるパンフレット群、そして長期的展望をもつ『キリスト教綱要』を書いたのである。

論争に必須なことは、論点を明らかにした上で相手の論の誤謬・弱点を見破り、それを提示することであろう。しかし、たとえばカルヴァンは聖遺物を批判するが、「それを悪用することがどんなに嫌悪すべきことかを論じる意図はない」と書く。これは時間的制約や謙遜をあらわすというよりも、むしろ積極的な戦略ともとれる。一般読者に広く読まれるためには、短さと明瞭さ、そして面白さが不可欠だからである。そのうえでカルヴァンは聖遺物のカタログを書き出し、それらがいかかにでっちあげられた偽りの「もの」であるかを明らかにし、愚かな茶番が恐るべき偶像礼拝を生み出していく様子を浮き彫りにする。力となるのは調査・収集能力であり、かつ文章力なのである。

論争文書となると、戦略はさらに磨ぎ澄まされていく。『魂の眠りについて』に見られる論法は、まず主題を論者、読者のいずれにも納得が行くまで明確にし、次に相手の論点を相手が袋小路に追い詰められるまで述べたて、さらにそれによっておのずから築かれた道を進んで自説を立証するというものであった。

『サドレへの返書』は、サドレの手紙の倍の分量があり、構成も迫力もまさっている。導入の個所でとくに目につくのは、一介の被追放者である青年改革者が論争の場（土俵）を作りながら自分の立場を相手と同等の位置に据えていく大胆さである。カルヴァンは、まずサドレの学識と名声をほめたたえた上で、サドレがジュネーヴ市民にローマへの復帰を勧誘したことを指摘する。そして自分の牧師職が神の召命によると述べることによって自分の場を獲得し、徹底して相手の言い分を逆手に取る戦法を続ける。たとえば、サドレ

が労したことは「私〔カルヴァン〕の言葉に対する〔ジュネーヴ市民の〕すべての信頼を失わせることであった」と書く。それは侮辱罪にあたるであろう。攻撃に報いるに反撃、侮辱に対するに弾劾、脅しに対しては問責を打ち返さなくてはならない。それも逆上してではなく、冷静な計算をもって相手の隙を衝くのである。

(2) Dispositio

Dispositio (配置) は、おそらくカルヴァンがもっとも気にかけていた事柄の一つである。『セネカ「寛仁論」註解』においてすでにこの問題への関心を見せている。しかし、配置に関わる苦心がもっとも顕著に見られるのは、主著『キリスト教綱要』である。1536年版(初版)、1541年版、1560年版と、主な版の目次を比較するだけで、それは察せられる。

1536年版(初版)は、執筆当初の意図としては十戒、使徒信条、主の祈りの講解が考えられたようである。ところが1534年10月の檄文事件によって世論が悪化し、福音主義の弁明書を書く必要が生じたため、途中から構想が変わったのである。その変換は、第五章「偽りの聖礼典」あたりから急速に高まる論争的調子に表れている。

『キリスト教綱要』が版を重ねるにつれてその配置が変わっていった例は、「予定論」と「キリスト者の自由」である。1536年版(初版)で「予定論」は、まとまった論の形では出てこない。かすかに第1章「律法について」の終わりに善行による救いの教理を退けて、神の救いの計画の確かさを強調するために「選び」が書かれ、第2章「信条について」の中で教会が「選ばれた者の集団」として描かれているのみである。この版の直後、1537年2月の『信仰の手引き』に「選びと予定について」という項目が見られる。それは、律法についての諸項目と信仰についての記述の境目に位置している。人間に無力と罪を教えるために神から与えられた律法はキリストへの信仰に至る段階であった。しかし、現実には神の言葉を受け入れるのは限られた信仰者のみである。カルヴァンはこの現実を「神の計画 conseil の大いなる奥義」と捉え、信仰も神から与えられる賜物であると説明している。

第二版(1539～1541年版)では、一七章のうち第8章に「神の予定と摂理について」という項目が現れる。予定と神の摂理は、同じ事柄の二つの面として捉えられている。

第三版(ラテン語1543年、フランス語1545年)は二一章となり、「予定」は第14章に来る。それと共に第二版では第14章に置かれていた「キリスト者の自由」が前に移動して、「人間の伝承」と共に予定論の前置きになる。これは『綱要』がますます論争的になっていくあらわれと言えるだろう。

1550年から1557年にいたる『綱要』は、パラフレーズの分け方など細かい変更の他は、あまり大きな変化は見られない。最終版(1559～1560年版)は初版の十数倍の分量を持ち、全四巻八〇章から成る大著である。予定論は、第三巻信仰の部の終わり近く、第21章から第24章までを占めており、題名も「永遠の選びについて、それによって神はある者たちを救いに予定し、ある者たちを断罪に予定された」となる。

総じて予定論がカルヴァンの教義の基礎でも中心でもなく、その帰結であり、キリスト論の中での具体的な事実として位置づけられるに至ったことは、教義全体の中での「予定」の位置からも結論できるのである。

(3) Elocutio

Elocutio (表現) の面では、カルヴァンの雄弁を証する文章のうち特に「対立」ないし

「対照」の効果をよく出している例を挙げることができる。たとえば『フランス国王への序文』や『ニコデモの徒への弁明』などである。

2 解釈としてのレトリック

Dispositio (配置)

解釈としてのレトリックが現れるのは、主として聖書註解である。聖書註解において inventio (発想) はある意味ですでに前提されている。そこで二番目の dispositio (配置) から入っていくことにする。

カルヴァンの聖書註解は、語句や時代背景についての注であるというよりもさらに踏み込んで、レトリック的関心の強い解釈行為となっている。これこれの部分が著者の意図の中でどこに配置されているのか、導入か展開か、前の部分の反復か敷衍か、実証か強調か、正位置か破格の位置か等々の考察がなされて初めて読者は聖書というテキストに迫ることができるのだということをカルヴァンは示すのである。

たとえば、『ローマの信徒への手紙註解』のレトリック的特性は、つとに認められている。構成は「序文」、「論旨」(argumentum)、「本文註解」から成る。

「序文」では、控え目ながら本書を著す目的をはっきりと語る。また読者を「ふつうの精神を持つ人々」と設定し、神学者や聖職者のみならず、教会に集う一般信者に向けたものであることを示す。ただし、ブツァーやプリンガーやメランヒトンやエラスムスなども読者として想定している。さらに、本書がもたらす「益」についても語る。一般の人々のために簡潔な中に全体を含む註解を書くことこそが「教会の益」になると書くのである。

「論旨」(argumentum) においては、ローマ書の論旨を構造や配置や論法に重点を置きながら要約しており、これ自体がすぐれた紹介であり、分析である。カルヴァンの関心は、著者である使徒パウロがどれほどのレトリック的手法と努力を払って主題である「信仰による義」、すなわち律法と福音の問題を読者に納得させようとしたかを明らかにすることである。

「本文註解」においては、まず各章の固まりをなす数節が訳出(ラテン語、フランス語)される。その下に一節ずつの注釈がつく。ここでもカルヴァンが注目するのは、その節、あるいは段落の文脈であり、構造的な位置である。その際、「ここまでのところで」、「さきに」、「今や」、「し始める」、「ふたたび」、「立ち帰る」といった時間的経過を示す語句の使用によって読者はパウロの論理を時間的に追って行くことができる。あるいは、「全体的に」と「個別」、「一方で」と「他方」、「弾劾」と「教え」、「戦い」と「慰め」といった対立的な表現によって文章の構造が浮き彫りにされる。さらに「これは議論の仕上げである」とか「これは議論を長引かせる余分な反復と見えるかもしれないが、前の文章の必須の説明である」とか「これは先行する議論の結論である」などという。こうして一つの文章が議論の中で占める位置を示すことにより、注釈者は文脈的理解を読者に準備させるのである。

Elocutio (表現)

カルヴァンは『ローマの信徒への手紙註解』で、じつに三十種類ほどのレトリック用語で議論の論法を説明している。それは以下のような用語である。「対立・対照法」、「代換法」、「擬人法」、「強勢法」、「ディレンマ」、「迂言法」、「黙説法」、「隠喩、比喩」、「アレゴリー」、

「予弁法」、「漸層法」、「交渉法」、「除去法」、「換喩」、「提喩」、「倒置法」、「シンメトリー」、「大から小へと論じる論法」、「小から大へと論じる論法」、「二つの対立する事柄の比較」。これらの用語をカルヴァンが駆使したのは、パウロの技巧を称賛するためではなく、自身のユマニスト的教養を誇るためにでもなく、テキストの特徴を早く捉えるのに便利であると考へてのことであろう。

そして、カルヴァンがパウロのテキストに「隠喩」や「提喩」や「換喩」が用いられていることを示すこと、たとえばサクラメントを「換喩」とすることにおいて強調したいことは、「真理」をただ単に表象するだけではなく実在するものとして「提示すること」(offrir) ができるような「しるし」である。

たとえば、ルター派とツヴィングリ派の間に生じた聖餐をめぐる紛争は、表象の不十分な理解と、粗野な表現の仕方によるものであった。「聖餐論」の終わり近くでカルヴァンは両派の誤りを指摘しているが、その際、ルターの誤りは表現の仕方にあるのであって内容ではないこと、またツヴィングリの側も意図は真摯であったが、表象と真理の結合という重要な事柄を理解せず、また表明しなかったことにあることを明らかにしている。言語の無理解や誤解が教義の不一致をもたらすに至ることを、レトリックの実践家カルヴァンは承知していたのである。

○評価と適用

(1) 「説教とは、レトリックを用いて書かれた聖書の御言葉を、レトリックを用いて言述することである」と考へてよいか。その場合、聖書のどこまでがレトリックであり、どこからはレトリックでないかを見分ける判断基準は何か。恣意的判断が持ち込まれないようにする歯止めは何か。たとえば、「受肉」や「復活」や「再臨」はレトリックか。近代神学において繰り返し論じられてきた Historie (史実) のイエスと Kerygma ないし Geschichte (歴史物語) としてのキリストの区別を、カルヴァンならばどのように見るだろうか。

(2) 説教の改善のために不可避的な手続きは、やはり、説教の完全原稿の作成とそこで用いられている(久米先生が定義なさった意味での)「レトリック」の分析であるという点に思い至る。さらに願わくは、説教者集団(牧師会)における相互批判が不可欠であろう。いずれにせよ、説教における dispositio (配置) の改善は、メモ書きに基づく即興説教のようなことを続けているかぎりほとんど不可能であると感じられる。

(3) 説教における dispositio に関しては、E. トウルナイゼンが「説教の始め方、進め方、終わり方について」で論じていることが参考になる(K. バルト・E. トウルナイゼン著『神の言葉の神学の説教』加藤常昭訳、日本基督教団出版局、233～248 ページ)。説教は「ただちに聖書解釈から始める」のが正しく、また「テキストをもって終わるべきだ」とトウルナイゼンは言っている。「扉に歩みより、把手を実際につかみ、踏み込んでいく決心がつかないままに家のまわりをぐるぐるうろつきまわる」ような説教の導入部分は不要である。「さて、使徒が語ったことをわたしたちは今聞きました。それをもう一度思い描いてみましょう！」というような説教の結び方も致命的である。説教の構造は聖書テキストによって決まる。「テキストの区分をしっかりと守り、この区分についての考察をいつも説教の勉強のまず第一のこととしたらよい」のである。

(4) 書き言葉のレトリック、とくに dispositio (配置) の面を磨くための今日的な方法の一つは、電子メールを書くことに習熟することではないかとも思い当たる。電子メールにおいては、画面を最後までスクロールしなければ結論が出てこず、論旨が明らかでないような文章は嫌われる。逆に、開いた最初の画面に要点のすべてが簡潔に書かれていると、その先も続けて読んでもらいやすい。説教も「最初の三分間が勝負である」と言われることがある。結論は冒頭に置くほうがよいのである。

(5) 「益」ないし「利益」(ドイツ語 Nut、オランダ語 nut など) を積極的に語る伝統は、ハイデルベルク信仰問答などに受け継がれている。「キリスト教はご利益宗教ではない」というしばしば耳にする言葉は、カルヴァンの伝統から出たものでも、改革派諸信条の伝統から出たものでもなさそうである。

(6) 細部にこだわるようだが、『キリスト教綱要』最終版における予定論は「キリスト論」ではなく「聖霊論」に位置づけられているのではないだろうか。キリスト論と聖霊論は「子からもまた」(filioque) の絆で固く結ばれた同一事実における客観面と主観面の違いにすぎないとするカール・バルトの立場をファン・ルーラーは批判した。御子(イエス・キリスト)は「受肉」(assumptio carnis=人間性の摂取)したが、聖霊は「受肉」しないからである。またもしキリストの「受肉」が(最初のクリスマスにおいて)歴史的に一回のみ起こった客観的事実ならば、聖霊の「注ぎ」も(最初のペンテコステにおいて)歴史的に一回のみ起こった客観的事実だからである。ファン・ルーラーによると、キリスト論においては「神の御子(=三位一体の第二位格)が人間性(human nature)を摂取する」という以上は語りえない。神の御子が人間存在(human existence)を摂取する、と論じたとたん、キリストについて二性二人格(二重人格)を語る過ちに陥ってしまう。ところが、聖霊(なる神)はわれわれ人間存在に「内住」(inhabitatio)すると語ることは許される。聖霊論においては「神がわれわれ人間存在(human existence)に内住し、かつ人間存在を用いてお働きになる」という論理が成立するのである。キリスト論のなかでの神と人間の関係と、聖霊論のなかでの神と人間の関係とでは構造的に異なるのである〔以上がファン・ルーラーの所説である〕。予定論は、聖霊論の文脈に置かれることがふさわしい。われわれ人間存在(この中には理性も意志も感情も含まれている!)の正当な位置づけを欠く予定論は、たとえ「キリストの衣」をまとっているとしても、結局のところ「絶対的宿命論」に陥るのではないだろうか。カルヴァンは、予定論を聖霊論の文脈で論じた先駆者ではないだろうか。